

During the seven years I served as Secretary of Defense, under Presidents Kennedy and Johnson, both U.S. and Soviet understanding of the political and military implications of the introduction of nuclear

# 世界核戦略論

平和のたための  
真実の提言

weapons was evolving slowly. In the following thirteen years, while president of the World Bank, I was unable to participate in the debate that developed over how best to strengthen our security in a nuclear

## R・マクナマラ

元米国  
国防長官

藤本直 訳

test bans, nuclear freezes, new control agreements, etc. In have done so through publication of a series of articles, often in association with others, in Foreign Affairs and the Atlantic Monthly, and through lectures before the Council on Foreign Relations and on university campuses.

## BLUNDERING INTO DISASTER ROBERT S. McNAMARA

As my own thinking has advanced, I have become more and more concerned that our nation--and indeed the

### 〈著者略歴〉

ロバート・マクナマラ (Robert S. McNamara)

ケネディ、ジョンソン両政権下(1961~68年)で7年にわたり国防長官を務め、続いて81年まで世界銀行総裁の要職にあった。国防長官時代は、核兵器導入の政治的、軍事的意味合いに対する米ソの理解を深め、恒久的世界平和を実現するために尽力した。世銀総裁退任後のこの5年間も、「フォーリン・アフェアーズ」や「アトランティック・マンスリー」などの雑誌を通じて、また外交問題評議会や各地の大学での講演の形で、核実験禁止条約の締結、核凍結地域の創設など核時代の安全保障へのアプローチを積極的に論じてきた。この著書は、それらの草稿をまとめたものである。

### 〈訳者略歴〉

藤本 直(ふじもと なおし)

昭和18年山口県生まれ。上智大学外国語学部卒業。

訳書には「石油謀略」(TBSブリタニカ)「ニッポン幻想」(講談社)「フォースの誇たニッポン」(パワー・マネジメント)(PHP研究所)など。

## 世界核戦略論——平和のための真実の提言

1988年2月10日

第1版第1刷発行

著 者 R・マクナマラ

訳 者 藤 本 直

発 行 者 江 口 克 彦

発 行 所 P H P 研 究 所

〈東京事務所〉 03-239-6221

〒102 千代田区三番町3-10

〈京都本部〉 075-681-4431

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

印 刷 所 大日本印刷株式会社

製 本 所

©Robert S. McNamara 1988 printed in Japan

落丁・乱丁本の場合はお取り替えます。

ISBN4-569-22120-3

## はじめに

私がケネディ、ジョンソン両政権のもと、七年間にわたって国防長官の職にあった間に、核兵器の導入、配備をめぐる米ソの政治的、軍事的理解はゆっくりとながら、深まっていた。世界銀行総裁に転じた私は、その後一三年間、核実験禁止に関する論議や、核凍結、新兵器開発プログラム、軍縮協定その他をめぐる、いわば核時代におけるわが国の安全保障を向上せしめるための各種議論に加わる機会を持ち得なかった。

しかし五年ほど前から、『フォーリン・アフェアーズ』誌や『アトランティック・マンスリー』誌にしばしば（時に他の著者と連盟で）論策を発表したり、上院の外交委員会あるいは大学に呼ばれて意見を開陳したりという形で、私なりの信念、思うところを公にしてきた。

そうした歩みのもとに考察を深め、そして思うことは、これまでわが国のみならず世界全体が、保有する核戦力のレベルについて、また軍事戦略の策定について、あるいはこの世の破壊と背中あわせの危険を最小のものにするに有効な各種の軍備管理・軍備削減協定を協議し、合意するについて、長期的なヴィジョンを持たないままに間に合わせの仕事を遂行してきた、ということである。

このような長期の枠組、基本方針が策定され、それが現実のものとして具体化されるのは、おそ

らく今世紀末ごろ、あるいはその先何年かしてということになるかもしれないが、少なくともそうしたマスター・プランがあれば、その間、わが国が新しい兵器開発計画を打ち出すにあたっても、NATO諸国との関係を調整する必要にせまられた場合でも、あるいはソ連と軍縮交渉をすすめるに際しても、これが有効な尺度もどきとしての役割を果たすと思うのである。

こうした基本的枠組作成の一助にと以下試論を語ってみたが、本書はデューク大学サンフォード講座において過日論じた分析、主張をベースに大幅な加筆をおこない、まとめたものである。

一九八六年七月九日

ワシントンDCにて

リーダー実践マニユアル

# 最高の上司とは何か

C・レイモルド 著  
小林 薫 訳

指導力を高めるには？ チームを活性化させるには？ リーダーたるあなたを成功に導くアメリカ式7つのステップ。心理学的効果や最新の組織論をふまえ、上司として最大の効果を上げるための具体的なノウハウを説く。

定価 一、一〇〇円

部下のやる気を  
ひき出す話題の書！

## PHPの本

燃えるカリフォルニア

日米経済戦争の行方を探る

石川 好

このままではカリフォルニアは「第二の満洲」になる！ 日米摩擦の本質を日本・カリフォルニア関係を通して解き明かした話題作。

980円

ヨーロッパの戦略思考

米ソの「はざま」で何を選択するか

古森 義久

ソ連の脅威、アメリカの軍事要求の高まりの中で欧州諸国は自国の安全をどう図るのか。各国軍事研究者を取材し、その戦略を探る。

980円

「技術封鎖」の時代

トップ企業の戦略的思考

柳田 邦男

激しさを増す経済摩擦に打つ手はあるのか。日本商品締め出し・技術封鎖の危機の中で、トップ企業八社に今後の方向と戦略を聞く。

1200円

日米・開戦の悲劇

誰が第二次大戦を招いたのか

ヘルトン・マシニ著  
岡崎久彦監訳

なぜ日米は戦わざるを得なかったのか。アメリカの参戦事情をよく知る筆者がルーズベルトの野心が原因という視点から探る衝撃の書。

1300円

詳解・戦後日米関係年表

高坂正堯編著  
松下政経塾協力

年表に、写真・図表・高坂正堯氏書下し論文を加え、占領により始まった戦後の日本とアメリカの激動の「足跡」を事実により辿る。

1500円

\* 定価は昭和六十二年十二月現在のものです。

はじめに

第一章 ドキュメント・一触即発…………… 11

半世紀の間なぜ核は増え続けたのか／ベルリン封鎖——過小評価された  
ケネディ／ソ連ミサイル・キューバ搬入事件——フルシチョフの電文／  
第三次中東戦争——白熱した米ソホットラインの応酬／いつ始まるか予  
測できないのが戦争である／核戦争回避のための具体的ステップ

第二章 核時代、これまでの50年(米ソの核戦力、核戦略をふり返る)…………… 31

たとえば核戦争にも勝利し得るといふ「アメリカの信念」

●NATO戦力の形成と変転…………… 36

NATO軍が採用した「大量報復」戦略とは／ケネディの提唱した「柔軟対  
応」戦略への反発

●ソ連核戦略の変遷……………44

全面核戦争論から段階的戦争論へ／核戦争に勝者はいない

●NATO核戦略の分析と評価……………48

有名無実となった戦略核の第一使用／ヨーロッパが戦場になれば一億人が死亡する／“限定”核戦争という名の錯覚

第三章 おそろるべき核神話(国家の安全をそこなう誤謬と迷妄)……………61

世界の平和維持に関する八つの誤解

●ソ連の核戦力はアメリカ以上であるといふのは本当か……………65

驚異的な米ソ二大国の核破壊力／レーガンの警鐘する「脆弱性の窓」は本当にあるのか／最大のパラドックス——核の均衡がなぜ必要なのか／ソ連の核防御力強化はアメリカの安全に役立つという理由

●ソ連は第一撃能力を持っているというのは本当か……………78

巧妙につくられた「アメリカ敗北」の筋書き／ソ連の指導者ははたして狂人か／軍拡をエスカレートさせる恐怖の感情

●ソ連は世界の動静と無関係に核戦力拡大に猪突するというのは本当か……………87

米ソの核軍拡レースは「作用・反作用」の現象である／全米を震撼させたソ連ABM網の配備／米ソMIRV開発競争の顛末

●アメリカは科学技術によって優位を獲得できるというのは本当か……………98

アメリカ人の科学技術に対する危険なプライド／MIRV・海上発射ミサイル・対衛星兵器の開発は米国に何をもたらしたか

●核の増強は不可避であったというのは本当か……………104

全面核実験禁止条約に反対した米国議会の愚／歴史の皮肉——MIRVからミゼットマンへ

## 第四章

### 核戦略、これからの50年（最終戦争勃発の危険減衰をめざす諸方策）

年間二〇〇〇発の核弾頭生産計画がもたらす人類の未来

#### ●東西の和解のために……

東西両陣営が共通してかかえる命題とは／対ソ経済制裁の無益性について／「軍拡」という怪物は一人でも動き出す

133

●ソ連は姑息だから協定を結ぶのは無意味であるというのは本当か……

111

米ソ協定順守の記録を検証する／SALTを軽視するレーガン政権

●軍縮協定はソ連を利用するだけであるというのは本当か……

119

●核は軍事的にはともかく政治的武器として利用し得るとい  
うのは本当か……

123

127

●核兵器の全廃——ゴルバチヨフの提言……………141

核制限条約への違反は現実的に不可能である／核兵器ゼロの世界は本当に安全か

●攻撃核戦力を防衛核戦力に置換すべし——レーガンの提言……………146

スター・ウォーズ計画は米国民を核攻撃から守れるか／ヒロシマが「戦争」ということばの意味を変えた／莫大な資金を要する「黄金の銃弾」

●核抑止力強化の意味するところ……………157

完全な国土防衛システムなどあり得ない／キッシンジャーの核抑止力増大論／ソ連への猜疑心を捨てきれないアメリカ人／SDI技術の供与は最先端コンピュータ技術の供与にほかならない／米ソ軍拡競争をエスカロートさせるスター・ウォーズⅡ／協定によって軍備を管理することの至難さ／SDIに関する削減協定を結ぶことは可能か／大統領戦略戦力委員会の提案／ソ連の驚くべき兵器開発能力

●軍事戦略を立案し軍縮協定を論議する際、核兵器とはもはや使用不能の兵器と心得よ……………182

核の唯一の用途は抑止力である／ソ連の侵略を抑える本当の要素は何か／NATO核戦略のもつ弱点

●政治的・財政的に妥当かつ信頼度の高い通常戦力防衛は可能か？……………193

最新テクノロジーによる防衛力の飛躍的進歩／米ソ両国何発の核保有が適当か／核五万発から一千発体制の世界へ

## 第五章 ジュネーブ軍縮会議から学ぶもの

(世界的視野に立った長期目標達成の出発点)……………203

戦略防衛兵器配備の二要件／現行のABM制限条約を検証する／無益な軍拡競争による経済の疲弊

## 第六章

### 核破滅の危機を回避するには………

215

核の本当の恐ろしさに対する無知蒙昧／チエルノブイリ原発事故の教訓  
／ケネディ、ジョンソン両大統領に私が進言し続けてきたこと／もし核  
が使用されるとしたらパニックの中である／核に対する第三国の発言  
権も重視すべきである／恒久平和のためにこれから人類がなさねばなら  
ないこと

## 第七章 付

### 録(スター・ウォーズ防衛システム技術ノートおよび参考資料)………

235

SDーシステムの維持に必要とされる高度な技術力／ソ連の対SDー対  
抗措置をどうかわすか／X線レーザー兵器の問題点／運動エネルギー兵  
器とは／鏡が弱点となる一連の光学レーザー・システム／SDーシス  
テムの「目」はどこまで敵を見分けられるか／困難なSDーのコンピュー  
タ・ソフト開発／テクノロジーに人類の生存を託す愚かさ

## 謝 辞

増版によせて

——レイキヤビク以後世界はどう変わったか



第一章

ドキュメント・一触即発

THE RISK OF NUCLEAR WAR



### 半世紀の間なぜ核は増え続けたのか

アルバート・アインシュタインがルーズベルト大統領に歴史的書簡を送り、アメリカの原子爆弾開発をもっと急ぐ必要があると強く訴えてからほぼ五〇年の歳月が経過する。

この半世紀の間に、世界に存在する核爆弾の数は、ゼロから五万発へと拡大、それぞれの核爆弾は平均して、広島に投下された原爆の三〇倍の破壊力を持つにいたっている。この五万発の中のほんの数百発を炸裂させるだけで、アメリカ、ソ連、そして両大国の同盟諸国のみならず、核爆発に起因する異常気象のために、地球全体が破壊し尽され、人の住めない世界が現出することになる。

この恐怖の破壊兵器は世界に広く配備され、各種の軍事戦略を支える柱となっている。この兵器をどのような形で使用するか、そのプランの詳細部分は前線の指揮官の判断にゆだねられ、東西両陣営の核関連部隊は現実には、核兵器の使用を想定した軍事演習を盛んに繰り返している。

NATOの欧州連合軍最高司令官バーナード・ロジャーズ陸軍大將は、西ヨーロッパ地域で有事発生という事態になれば、NATOの指揮官たちが数時間後に核兵器の先制使用を求め、その許可を願ひ出てくるのはほぼ確実であると述べている。

こうした現実の姿は、長年月の間におびただしい数の決定が下され、積み上げられた結果として生まれたものである。こうした決定の多くに私自身も関与している。個々の決定事項は、その時それ自体を取り上げて吟味した場合、まことに合理的に見え、それしか道はないように思われた。し